

「小竹貝塚の変遷」展のポイント

小竹貝塚は、100体にもわたる縄文時代前期（約6,000～5,000年前）の人骨が発見された日本海側最大級の貝塚として知られています。その後の変遷をご紹介する本展のなかで、特に注目していただきたいのが弥生時代の状況です。

弥生時代の展示品について、ご観覧いただく際のポイントを以下にご紹介いたします。なお、詳細は「小竹貝塚の変遷」展資料をご覧ください。

1	平成20・24年度の発掘調査出土品から、 弥生時代の調査成果を紹介する初めての展示 です。展示品は、目玉となる 県内最古（弥生時代後期前半=約2,000年前）、かつ日本列島最北域の木盾など、約30点（すべて初公開） です。
2	木盾は、長軸（木目）と直交するように紐列で補強した弥生時代の木盾の代表的、かつ普遍的な構造（モミ製の紐列式木盾） です。実戦の際に移動しやすいよう軽量化するため、厚さ約1cmと薄く仕上げています。紐列は、実戦で矢が刺さった時に、その衝撃で木目に沿って盾が割れないようにするための工夫（補強策）です。
3	富山県内の木盾は、小竹貝塚出土品のほか、氷見市惣領浦之前遺跡（弥生時代後期後半=約1,900年前）で出土しているのみです。両遺跡の出土品ともモミ製です。弥生時代の木盾は 剣形・刀形といった武器形木製品などと一緒に出土することが多く、儀礼の道具としても使われました。
4	木盾は、弥生時代の日本列島に広域分布したことから、当時の地域間のネットワークのあり方を考えるうえで重要な資料です。小竹貝塚と惣領浦之前遺跡から出土した木盾は 最北域の資料のひとつであり、木盾を用いる戦い、あるいはその儀礼といった文化が北陸にも広く及んでいたことを示しただけでなく、ネットワーク拠点としての富山の重要性を明らかにしました。
5	呉羽丘陵北端（台地北西側）では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落や墓が営まれます。 最先端の農業技術や文化、水田稲作に伴う農耕儀礼をもった有力な集団が呉羽丘陵に進出し、水田稲作の場として選ばれたのが低湿地の小竹貝塚と考えられます。

本展をご覧いただくと、縄文時代前期というイメージが強かった小竹貝塚に、新たな一面が垣間見えてくると思います。縄文時代前期の本遺跡の重要性はこれまでも増して明らかになりつつありますが、それだけでなく弥生時代後期にも地域社会のネットワーク拠点として重要な時期があり、その後も人びとの営みがあったことを感じていただければ幸いです。

木盾の出土遺跡を厳密に緯度からみた場合は、小竹貝塚（北緯 36 度 43 分 10 秒）よりも氷見市惣領浦之前遺跡（北緯 36 度 48 分 18 秒）が北に位置します。全国的にみた場合、富山県内の遺跡出土木盾は、長野市や金沢市の遺跡出土木盾ともに分布の最北域（北緯 36 度 33～48 分の南北約 28km 圏）に相当します。

弥生時代後期から終末期の北陸の土器は、北東部（能登以東）と南西部（加賀以西）で差が認められます。似た土器が広域分布することは、婚姻や交易などをとおして日常的に交流があったことを示します。

長野（北信地域）でも北陸北東部系の弥生土器が出土します。それは、北陸北東部と交流があったことを示します。

小竹貝塚の木盾は、このような日常的な交流関係に加え、弥生文化が西日本から東日本へと波及する大きな流れのなかで、木盾を用いた戦いや儀礼が富山へ及んでいたことを示す資料であると同時に、長野など上信越地域とのつながりも想定できる重要な資料です。つまり、弥生時代後期の小竹貝塚が上信越地域とつながるネットワークの拠点だったことを、私たちに教えてくれているのです。

北陸および分布周縁域の木盾出土遺跡

